

より遅く、より低く、より優しく

参加型システム研究所理事長

神奈川大学名誉教授

橘川 俊忠

◇速くて見えない

先日、所用があって久しぶりに能登に行った。能登は30年ほど前から10数年にわたって古文書調査で毎年2回ずつ通った地であった。その往復は、数台のマイクロフィルム撮影用の機材を運ぶなどの必要もあって8人乗りのバンを使うことが多かった。横浜を出発して、中央高速で松本、安房峠を越えて富山に出て富山湾沿いに能登まで、途中休憩を入れて10数時間、着いた時にはクタクタという状態であった。それが今では、飛行機で自宅からの時間も含めて3時間で着いてしまう。帰りは、金沢を回って新幹線に乗ったが、金沢から東京まで2時間半余り。速くなったものである。

速くなり、便利になってたしかに仕事の効率は高くなったかもしれない。しかし、そのために失ったものも少なくない。旅を楽しむ余裕がなくなったことも一つである。景色を見ようとしても、速すぎてよく見えない。飛行機では、高すぎて立体地図を見ているようだし、新幹線はものすごい速さで回る回り灯籠を見ているようなものだ。

金沢からの帰りの新幹線は、台風19号の被災地を通るので、少しでも被災の状況を確認したいと思ったが、速すぎて確認できるどころではなかった。高架線からでは高すぎて屋根しか見えない。車内では車窓に目をやろうとしている乗客もまったく見かけなかった。被災地を通過していることなど気付きようがなかったのかもしれない。被災者への同情心があっても、それを自覚させるきっかけとなる景色が見えないのである。

◇競争を煽るオリンピックの標語

ところで、「より速く、より高く、より強く」というのは、オリンピックの有名な標語だが、それは本来アスリート個人に努力を期待し、励ますための言葉であった。しかし、今は、それは競争を煽るための標語に変化してしまっているのではなからうか。スポーツはメダル獲得のための手段と化し、国家をあげての支援を

受け、個人の利益や国威発揚こそが目的となってしまった。体や心を傷つけても勝つことだけに集中するアスリート、後を絶たないドーピング問題など、健康のためのスポーツなどどこへ行ってしまったのだろうか。

さらに、その標語は、グローバル化し、IT化した企業活動にふさわしい標語ともなった。取引の速度が上がり、取引額が高くなればなるほど企業活動の利益を増大させるチャンスが拡大する。そして、人々は、より速く、より高くを競い合い、その競争に勝ったものが成功者として祭り上げられる。強者・弱者、勝ち組・負け組という分断が進み、努力すれば夢は必ずかなうというような言説が振りまかれる。より速く、より高くを競い合い、強者になることが善であるという風気が充満した社会。そこでは、弱者・敗者への優しい眼差しは失われる。

◇オリンピックの年だから立ち止まって考えよう

いうまでもなく今年が東京オリンピックの年である。このオリンピックについては招致の時からいろいろ問題があったし、今でも次から次へと問題が起こっている。それらの問題のいちいちについては触れる余裕はないが、オリンピックが近づくにつれて繰り広げられているマスコミの報道ぶりのひどさには目を覆うばかりである。メダルへの期待、歓迎ムードを盛り上げようとする言辞の氾濫、復興五輪の名目もかすむ一方である。

プロ化し、ショー化したオリンピックは、しょせん虚しい巨大イベントの一つにすぎない。それは、そんなものだと割り切ればよい。しかし、変質した「より速く、より高く、より強く」の風気が社会に蔓延するきっかけになるとすれば大問題である。現代を生きる我々に必要なのは、じっくりと問題に取り組み、より低い視線で問題をとらえ、より優しい社会を作ることだからである。

(きつかわ としただ)